

25 歳

サークルとともに 教師修業は果てしがなく

鳥取県倉吉市立西郷小学校 松本勝男

どうでもいいが、私松本が結婚した年齢である。
青年向山氏は教育に夢とロマンをかける。
その生きざまが瞬間瞬間にほとばしり、あふれでる。

1 児童詩と批評

詩の批評はこのようにする。

向山氏の批評を抜粋した。

- (1) 労働のたくましさ、緊張感が出ている。
- (2) 生活の1こまが詩の中に見事にあらわれている。
- (3) 人の心を引きつけるような詩だ。
- (4) かんけつでよい。「ゲエッ」の一言は実にすばらしい。
- (5) おもしろい詩だ。いらぬ言葉が多すぎる。
- (6) 最後の一行すばらしい子供だ。
- (7) 試合の時の気持ちが俺にもよくわかる。さすが6年の詩だ。
- (8) 「お金助かる」といってくれたお母さんの気持ちわかる。そして君の気持ちももっとわかる。
- (9) かけない詩を書いた君の勇気をたたえたい。君はこれでまた、たくましく成長した。
- (10) 最後の一行とてもいい。君の気持ちがわからないからつまらない。
- (11) この詩をよんでぼくはとおいむかしの子どものころを見つけた。すばらしい詩だ。
- (12) そんなに“かわいい子”がとなりにいてきみはしあわせだ。
- (13) 事実をならべただけなら詩とはいえない。
- (14) 君は石黒に一年間ならって、こんなに感動のうすい詩しかかけないのかなあ。石黒先生の今後を期待する。

- (15) つらくてもくじけるなよ。
- (16) 詩としてもものたりないが、あの時の、むねしめつけられる思いが、よくでている。
- (17) おたまじゃくしの口の大きさがかんじられるきみはずばらしいな。
- (18) その時のようすがなんとなくわかる。
- (19) これだけの長い文を「けんか」のことからはずれずに書けるのはずばらしい。
- (20) 報告だけでない日記がいい。日記とはこのように自分の考えをこそ書くべきだ。

詩を作った子どもが批評を読むことを想定し、向山氏は、基本的にはほめている。

子どもの意欲を喚起するためである。

また、「君が」というように二人称を使い訴えかけたりしている。

「つらくてもくじけるなよ。」これはその子の心に訴えかけているのである。

ロマンチックな青年向山氏の批評が初々しくまぶしい。

機関紙の後半になると、子どもの詩が、随分と長くなっている。

相互に批評しあいながら高まっていく姿がそこにはあるのである。

子どもが意欲をもって詩を作るためには、機関紙に載せていくことだ。

「あした」という機関紙を発行し、子どもの創作意欲を湧かせる方法がすばらしい。

数校の学校の子どもが登場することでいやが上でも意欲は増す。

また、複数の先生が同一の詩を批評しているのを私は見たことがない。

それを通信にのせる。これも一つの形態だろう。

2 京浜教育サークルの始動

サークル機関紙はこのように作る。

機関紙にサークルの歴史が刻まれているといっても過言ではない。

活動の盛んなところには必ず機関紙が存在するのである。

サークルに通信は不可欠である。

サークルの士気を高め、目標に邁進するためにはどうしても必要なのである。
発足当初は意気盛んだったサークルもいつしか沈滞し、そのうち消滅する。崩壊寸前というところもあるはずである。

そんな危機に瀕したとき、サークル機関紙がサークルを救うのである。

情報を作り発信する。

世に問う。世に提案する。そこに自分や自分たちの存在意義を見つけていくのである。

その研究の集積がサークル機関紙である。

機関紙にはどのような項目が必要か。

No.

日付

名前

編集、発行

連絡責任者（氏名、学校名、電話）

研究会の概観（時、所、出席者、研究課題、レポート）

お知らせ（次回の日時、場所、研究課題）

ナンバーを書くことで、意欲が湧く。書いた書いた、たくさん書いたと思って
も数えてみると意外に枚数は少ないものである。

100号という数は意識しないと相当難しい。

日付も情報処理には欠かすことはできない。

サークル機関紙を継続するためには何が必要か。

B5判1枚にすることも考える。

B4判にこだわり過ぎると、筆が進まなくなるときもある。

機関紙はお知らせではいけない。

文章に つや がある。

つまり、主張が必要なのである。

サークルを続けるためには何が必要か。

機関紙の発行が不可欠である。

そのためには強力なライター、夢、情熱。意気込み。

そのような人が、一人いれば、続くのである。

少人数サークルを嘆くことがある。通信にそのことを書き、嘆き、サークルの
今後は悲観的に見る。

しかし、それは消滅の一途をたどるだけである。

申し合わせ事項として、次のようなことが記載されている。

休むときは知らせる。

定刻主義でいこう。

批判に対する弁護は最後に。(ヒハンがにぶるから)

ちこく1分10円

年度末の実践レポートを出そう。

これは、もっともなことだろう。が、継続は難しい。

ともかく、サークルを続けるためには、少なくとも一人の燃えるような情熱が
必要なのである。

その一人が、若き青年向山氏であったのだろう。

氏の時代を動かすような勢いが京浜教育サークルを今日まで導いたのである。

この巻は以上のことを教えてくれる。

教師修業は果てしがらないのである。

松本勝男(まつもと かつお)＝法則化サークル 山陰なしの会